

よみがえりの力を持つ必要性

2006. 11. 28 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

列王記・第二 3章16節から24節

彼は次のように言った。「主はこう仰せられる。『この谷にみぞを掘れ。みぞを掘れ。』主がこう仰せられるからだ。『風も見ず、大雨も見ないのに、この谷には水があふれる。あなたがたも、あなたがたの家畜も、獣もこれを飲む。』これは主の目には小さなことだ。主はモアブをあなたがたの手に渡される。あなたがたは、城壁のある町々、りっぱな町々をことごとく打ち破り、すべての良い木を切り倒し、すべての水の源をふさぎ、すべての良い畑を石ころでだいなしにしよう。」朝になって、ささげ物をささげるところ、なんと、水がエドムのほうから流れて来て、この地は水で満たされた。モアブはみな、王たちが彼らを攻めに上って来たことを聞いた。よろいを着ることのできるほどの者は全部、呼び集められ、国境の守備についた。彼らが翌朝早く起きてみると、太陽が水の面を照らしていた。モアブは向こう側の水が血のように赤いを見て、言った。「これは血だ。きっと王たちが切り合って、同士打ちをしたに違いない。さあ今、モアブよ、分捕りに行こう。」彼らがイスラエルの陣営に攻め入ると、イスラエルは立ってモアブを打った。モアブはイスラエルの前から逃げた。それで、イスラエルは攻め入って、モアブを打った。

エペソ人への手紙 1章17節から19節

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるよう。

先週末に、M兄の別荘で「よろこびの集い」がありました。それだけではなく、O兄弟の記念会もありました。初めて彼に会った瞬間から親しみを感じました。私と同じ年に生まれた兄弟だったからです。彼は病気を知らなかった男で、突然癌を発見された時、もうお手上げだったのです。医者は伝える勇気がなく、非常に辛かったのですが、息子が伝えたのです。「お父さん、もうちょっとしか、お父さんの命はないそうです。ですから、私の信じているイエス様を信じていただきたいのです。このままの状態では別れたら大変です。天国で再びいっしょになりたい！」と。お父さんは、「そうか。いつかあなたといっしょに集会に行きたい」と。ちょうどそのとき、宮崎県の綾で、「よろこびの集い」があり、息子の車で、(たぶん五時間くらいかかったと思いますが)悪天候の中を見えたのです。素直に

祈って、次の朝には「洗礼を受けたい」と言われたのです。新幹線よりも速いですね。(笑)

それからは、本当に主を第一にして、天に召されたのです。そして、十四年前のあの O 兄弟の記念会が今回行なわれたのでした。参加した人々の中で一番年配の方は、九十六歳でしたが、そのほか出席した親戚の人々も、交わるために、後までみんな残ったのです。十八人でしたか十九人でしたか。召された O 兄弟が「イエス様しかない」というはっきりした態度をとったからです。信じる者にとって最も大切なことは、「イエス様を知ること」だけでは充分ではなく、「主のよみがえりの力を持つ」ことが大切なのです。

先週、私たちは、この「よみがえりの力」を得た結果用いられたエリシャについて考えました。彼は、全力を尽くす者、後ろの橋を断ち切る者、信仰と忍耐力を持つ者、そして上からの力を待ち望んだ者でした。それから、死の川、いわゆるヨルダン川を渡るようになったのです。結果として、「主の力に動かされて用いられる器」となったのです。

信じた者にとって、一番の悩みとはいったい何でしょうか。「よみがえりの力」を持たないことではないでしょうか。今読まれたエペソ書のパウロの祈りを見ても、分かります。パウロは、イエス様を信じればそれで良いと思ったのではありません。つまり、「前進しなければならない。自分の力に頼らないで、よみがえりの力によって動かされることこそが大切だ」と。ですから、パウロはいつも、「キリストとその復活の力を知りたい。イエス様をもっと知りたい」と切に望み続けたのです。私たちにとって、イエス様のよみがえりの力をあまりにも少ししか知らないということが、一番大きな悩みではないでしょうか。

ですから、私たちの一番大きな悩み、すなわち、「よみがえりの力」について、もう少し考えたいと思います。

旧約聖書の中心人物のひとり、言うまでもなくダビデでした。主が恵んでくださり、ダビデに完全な勝利を与えてくださったのです。敵（モアブ）から攻められたイスラエルの民は、「主は何でもおできになる」と経験させられました。このダビデは、聖書の中で、「神の心にかなう人」と呼ばれていました。なぜかと言いますと、「主に抛り頼んだ」からです。

しかし、ダビデの子孫は、「主」に完全に従おうとしませんでした。ダビデの子孫は、主のみこころにかなわぬことを行ない、墮落し、偶像礼拝に陥ったと聖書は記しています。

列王記・第二 3章1節から3節

ユダの王ヨシャパテの第十八年に、アハブの子ヨラムがサマリヤでイスラエルの王となり、十二年間、王であった。彼は主の目の前に悪を行なったが、彼の父母ほどではなかった。彼は父が造ったバアルの石の柱を取り除いた。しかし、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を彼も犯し続け、それをやめようとはしなかった。

「意識して悪を行なった」「罪をやめようとしなかった」とあります。

結果は当然でしょう。イスラエルの民は、なるほど主に選ばれた選民ではありましたが、主に対する不従順によって非常に弱くなりました。

主との絶えざる結び付きがない限り、次第に弱くなってしまいます。イスラエルの民は、内面的に弱くなったばかりではなく、外からも絶えずイスラエルの敵であるモアブの人々によって脅かされてしまったのです。本当にあわれな状態になりました。

モアブの人々は、今のアラビヤの国々と同じように、主の民であるイスラエルの人々を完全に滅ぼそうという、ただひとつの願いを持っていました。いかにして敵と相いまみえたらよいのでしょうか。今読みました3章16節、17節をもう一回読みましょう。次のように書かれています。

列王記・第二 3章16、17節

彼は次のように言った。「主はこう仰せられる。『この谷にみぞを掘れ。みぞを掘れ。』主がこう仰せられるからだ。『風も見ず、大雨も見ないのに、この谷には水があふれる。あなたがたも、あなたがたの家畜も、獣もこれを飲む。』」

イスラエルの人々、神の民は、何の力も無く敵に向かって立ちました。水を持っていなかったということは、滅びに近い状態にあったということです。けれどその翌日、モアブ人たちは負けてしまいました。この秘密はいったいどこにあったのでしょうか。

イスラエルの民は、結局自分の罪を認めただけではなくて、それを告白しました。そして、主に従おうと心から望むようになったのです。「主はこう仰せられる。『この谷にみぞを掘れ。みぞを掘れ』」。そのとき、雨が降りそうにもなかったし、また、どこからか水が流れて来る様子もありませんでした。けれどイスラエルの民は、全くおかしい、馬鹿げた、考えられないことを信仰によって行ないました。すると、水たまりに水が満ちたばかりではなく、みぞに水がいっぱいになり溢れました。

もし、私たちが主のみことばに従順に従うなら、主はいつも必ず応えてくださいます。水はイスラエルの民にとって救いであり、また力でした。この同じ水は、敵にとっては災いとなりました。モアブの人々は、この水を血と見間違いました。いのちの水の流れは、イスラエルの民の絶望的な状態からの逃れ道でした。

ダビデという王はイエス様の象徴でした。ダビデが主の民に対する敵を打ち破ったと同じように、イエス様も敵なる悪魔を完全に打ち破られました。イエス様は十字架上で悪魔に打ち勝たれましたが、しばらくして悪魔は教会を攻撃し始めました。

悪魔は生きていて、私たちをも毎日攻撃します。「悪魔の力は私たちより強い」ことを、認めなければならないのです。

こんにち問題なことは、悪魔に対する、この世に対する、また、罪に対する戦いです。イスラエルの民がモアブの人々に向かって立ったとき、精神的な力を持っていませんでした。それと同じように、私たちが悪魔に立ち向かうときも、自分の内面的な弱さ、力無さを覚えるのではないのでしょうか。

それではいったいどのようにして悪魔に立ち向かったらよいのでしょうか。旧約聖書のことばですが、

歴代誌・第二 7章14節

「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。」

「その悪い道から立ち返るなら」と条件付きです。もし私たちが自分の過ち、わがままを告白し、へりくだって、イエス様の御顔を求めるなら、幸いです。もしそうするなら、私たちは新しくイエス様を知るようになり、よみがえりの力も知ることになり、御霊に満たされます。

悪魔は私たちを滅ぼそうとしています。私たちは主の御顔を仰ぎ求め、「信仰の従順」によって前進しましょう。そうするなら悪魔は私たちの生活に影響を及ぼさず、かえって私たちによって悪魔は滅ぼされ、主のご栄光と勝利が明らかになります。

「イエス様のよみがえりのいのち」は、私たちの勝利であり、悪魔の滅亡です。私たちの悩みは、よみがえりの力を持つために、毎日、新しく主イエス様にお会いしなければなりません。このほかどんな方法によっても、私たちの問題を解決することはできないのです。このほかどんな手段によっても、私たちの家族を救いに導くことはできません。これによらなければ、決して私たちから永遠のいのちに至る水は湧き出ないでしょう。

もし、私たちが「主のよみがえりのいのち」を持っているならば、周囲の人々はそれに気付くのです。私たちはこのほかに、人のたましいを得る方法がありません。私たちは、「主のよみがえりの力」を必要とします。信仰の従順によって、この力が私たちのものとなります。「私たちの信仰こそ、世に勝つ勝利の力です」とヨハネは書き記したのです。

もう一箇所読みましょう。

列王記・第二 4章の1節から7節

預言者のともがらの妻のひとりがエリシャに叫んで言った。「あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存じのように、あなたのしもべは、主を恐れておりました。ところが、貸し主が来て、私のふたりの子どもを自分の奴隷にしようとしております。」エリシャは彼女に言った。「何をしてあげようか。あなたには、家にどんな物があるか、言いなさい。」彼女は答えた。「はしための家には何もありません。ただ、油のつぼ一つしかありません。」すると、彼は言った。「外に出て行って、隣の人みなから、器を借りて来なさい。からの器を。それも、一つ二つではいけません。家にはいったなら、あなたと子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。いっぱいになったものはわきに置きなさい。」そこで、彼女は彼のもとから去り、子どもたちといっしょにうしろの戸を閉じ、子どもたちが次々に彼女のところに持って来る器に油をついだ。器がいっぱいになったので、彼女は子どもに言った。「もっと器を持って来なさい。子どもが彼女に、「もう器はありません。」と言うと、油は止まった。彼女が神の人に知らせに行くと、彼は言った。「行って、その油を売り、あなたの負債を払いなさい。その残りで、あなたと子どもたちは暮らしていきます。」

ここを読むと、非常に困惑したやもめの状態が分かります。彼女の夫は死んでしまい、彼女はふたりの子どもと残されました。債権者が来て、この子どもたちを連れて行って、奴隷にしようとしていました。考えられないほどの苦しみではないでしょうか。彼女のよりどころである夫はすでに死に、実である子どもふたりが今、取り去られようとしています。

このやもめは、油のつぼ一つしか持っていませんでした。そのほかに何にも持っていませんでした。ヘブライ語では、ひとりの人に油そそぐに足る油がつぼの中に入っていた、とあります。ほんの少ししか入っていませんでした。

イラン、イラク、アラビヤ、またイスラエルなどの地方では、油が一番大切です。したがって、いつも油をめぐる争いがあります。油を持っているということは、結局金持ちである、富んでいることを意味しています。油を持っている者は勝利者です。

いったい何のために油が使われたのでしょうか。今話しましたように、

- ・まず、油そそぐために、それを使ったのです。病人が出ると、その病人に油をそそぎ、病人とともに祈るのです。ここでは、油は「いやしの力」を意味します。
- ・また、油は栄養物として食べました。このやもめも、油を食料品として用いたに違いありません。ここでは、「いのちの力」を意味します。
- ・三番目に、油は灯りを灯すために用いられたのです。ここでは、油は「灯りの力」です。

やもめの悩みは、この油のつぼがほとんど「から」に近かったことです。油のつぼには、油と書いたレッテルが貼ってあったでしょう。しかし、中はほとんど「から」でした。中に少しはありました。けれども、これは十分な量ではありませんでした。それがやもめの悩みでした。彼女は、自分の貧しい状態を隠さずに話しました。2節の終わりを読むと、彼女は、一つのつぼの油のほかは家に何も無い、と言ったのです。何も隠さないで、正直に言ったのです。自分の貧しさと自分の悩みを公に話す人にだけにしか、手助けすることはできません。

このやもめは、全イスラエルの民の霊的欠乏の状態を象徴しています。イスラエルの民は、主によって選ばれた民でした。またイスラエルの民は、いやす力、いのちの力、照らす力を経験するため、またほかの人々にそれを与えるために選び出されたのです。けれど、イスラエルの民は偶像礼拝をし、主との交わりが少なくなっていました。イスラエルの民は、礼拝のために集まったのでしようけれど、いやしの力、いのちの力、照らす力を持っていなかったのです。形はあっても力が無かったのです。油のつぼはそこにありましたが、中身がほとんど入っていませんでした。形式的に集まることとは、主の忌み嫌われることではないでしょうか。

けれど、このやもめは、非常に祝福されるようになったのです。どうしてでしょうか。素直な信仰を持っていたからです。信仰の現われとは、従順に従うことです。エリシャは彼女に言いました。「ほかに行って、隣の人々から、器を借りなさい。少しばかりではありません。からの器を借りなさい」と。どうして…？ これは馬鹿げたことではないでしょうか。

「から」の器で金持ちになれるはずはありません。いったいどこから油を持って来ようと言うのでしょうか。生まれながらの人（肉の命だけで生きている人）は、このような馬鹿げていることを理解することはできない、と言うでしょう。「からの器を借りなさい」。周りの人々はいったい何と言うのでしょうか。きっとあざ笑うに違いありません。

「家に入って、戸の内に閉じこもりなさい。戸を閉じて、隠れたところにおいでになる、あなたの父に祈りなさい」とイエス様は言われました。悩みをもってイエス様のところに行きなさい。イエス様だけが助けることができ、イエス様だけが助けようとしておいでになります。

列王記・第二 4章4節

「そして家にはいったなら、あなたの子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。」

これこそ「信仰の従順」ではないでしょうか。やもめは油をつぎました。ほとんど「から」に近かった油が、泉のように溢れ出てきたのです。

もし私たちが信仰の従順によって主に従うならば、私たちの空虚は満たされ、主の栄光が現わされ、周りの人々も満足するでしょう。「信仰の従順」なしでは、私たちは主に喜ばれることができません。「信じます」、「信じます」と言っても、従おうとしなければ、この信仰はまったく役に立たないものです。

やもめは預言者のことばを聞いて、不可能な事がらを信じました。ですから奇蹟を経験したのです。私たちは聖書により、主のみことばを知ることができます。そのみことばをしっかりとつかみ、「信仰の従順」によって、前進しましょう。それが、私たちのなすべき唯一の道です。やもめの悩みは大きな富に変わりました。子どものような信仰の従順により、やもめの心の傷はいやされ、また飢え渴きもなくなり、やもめは周りの人々を照らす光となることができたのです。

油によるいやしの力、いのちの力、照らす力、これは何という素晴らしい富でしょう。

主は、何を考えておられるのでしょうか。「いのちの力に満たされた器」を主は望んでおられます。イエス様はあらゆるいやし、あらゆるいのち、あらゆる光の源そのものです。もし私たちが信じる者として、イエス様との堅い結び付きを持っていなければ、からっぽの油つぼと同じようなものです。油というレッテルは貼ってありますが、中身はほとんどありません。なるほど集会に出席はしますが、うちに力がありません。

イスラエルの民は、敵モアブを攻撃しましたが、内なる力がなかったのです。私たちの場合はどうでしょうか。谷は水で満たされました。つぼは油で満たされました。私たちはどうなのでしょう。私たちは「主の富」を持っているのでしょうか。それとも、持っているのはあわれむべき貧困でしょうか。

「生ける水」は富です。「油」も富です。聖書全体から言えることは、水と油は聖霊の象徴です。イスラエルの民は主に選ばれましたが、民の心はふたつに分かれていました。

一方は主を礼拝し、また一方では偶像を拝んでいました。やもめは少し油を持っていましたが、それだけでは十分ではなかったのです。イスラエルの民は、足りなかったのです。

私たちは霊的に死んでいる周りの人々の中で、イエス様の証し人として立とうとは思わないでしょうか。エリシャのことばに従いましょう。「ほかへ行って、隣の人々から、器を借りなさい。からの器を借りなさい」。

アブラハムを見てみましょう。

創世記 12章1節

その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

そしてヘブル人への手紙の11章の8節を読むと、次のように書かれています。

ヘブル人への手紙 11章8節

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

アブラハムに、彼の旅の目的を尋ねても、彼は、「すみませんが、私もわからない」としか言えなかったでしょう。これは、馬鹿げたことではないでしょうか。世の人の目から見たら本当に馬鹿らしいことです。けれど主の目からご覧になると、それは「信仰の従順」であり、そのあとに大きな祝福が伴います。

私たちは、なぜ貧しいのでしょうか。貧しくありたいからです。ひとりの非常に困ったやもめは、エリシャのところに行き、助けを求めました。するとエリシャは、からっぽの器を借りなさい。「から」の器を借りるように、と言いました。人間的に考えるなら、確かに「から」の器を借りても何の役にも立たないように思われますが、彼女は、従うことによって満ち溢れるばかりの祝福をいただいたのです。このような彼女の態度は、私たちの模範となります。なぜなら彼女は何ひとつ包み隠さず、ありのままの状態を、自分の困ったことをはっきり示したからです。

私たちもまた同じように、どんなに困ったことがあっても、そのときこそ、イエス様のみもとに行き、そのことを包み隠さず主に打ち明けるなら、罪咎を赦され、束縛から解放され、用いられる器となります。

かつてのからっぽの器は用いられる器となりました。もちろん言えることは、イエス様こそ私たちの天のエリシャです。私たちは「から」の器であり、イエス様は、その「から」の器を満たしたいと心から望んでおいでになるのです。

イエス様の弟子たちは、次のことを経験したことがあります。

ヨハネの福音書 1章16節

私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。

これはイエス様の弟子たちの素晴らしい経験でした。イエス様は私たちをも満たしたいと切に望んでおられます。預言者エリシャは、やもめが自分の持っている器だけを満たしてもらっただけではなく、ほかの人々の器をも借りて来て、満たしてもらおうようにと言いました。

同じように、私たちの場合も、自分だけが満たされるだけではなく、いろいろな問題で苦しみ、悩んでいる人々も満たしていただき、根本問題を解決していただくことです。私たちだけが満たされればそれで良いというのではなく、ほかの人々もまた満たされるように、私たちは主によって用いられるべき者です。

主は、詩篇の作者を通して言われたのです。

詩篇 81篇10節

**わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。
あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。**

「あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう」と。

イエス様は、私たちにほんの少しのものだけを与えたいとは思われず、完全に満たしたいと望んでおられます。残念ながら多くの方は、祈りを通して口を大きくあけようとはしませんし、また、イエス様が私たちを豊かに満たしてくださるまで、辛抱強く待とうとはしません。

ヨハネ伝2章7節を読むと、いわゆる「カナの婚礼」の話なのですが、イエス様は召し使いたちに、「水がめに水を満たしなさい」と言われたので、「彼らは水がめを淵までいっぱいにした」と記されています。そのとき彼らが必要としたものは、ぶどう酒であって水ではなかったのです。水をいっぱいにしても何にもならないと思ったなら、後の豊かな満たしの経験をいただくことにはならなかったでしょう。彼らは、人間的には主のご命令を理解することができませんでしたが、主のご命令でしたから、馬鹿らしいと思われるようなことを実行したのです。この従順を通して、彼らは奇蹟を経験し、豊かな満たしを受けたのです。

要求されていることは、私たちが素直に信じ、主の要求に従順に従うことです。これこそ、自分が満たされ、さらに、またほかの人のために用いられる秘訣です。少しだけの満たしで満足せず、淵まで満たしていただくことを、主は望んでおられます。私たちも、「主よ、どうか豊かに満たしてください」と、口を大きくあけて叫ぼうではないでしょうか。

聖霊に満たされることが要求されています。すなわち、聖霊なる主に支配されることです。

私たちは聖霊の働きに対して、三つの異なった態度を取ることができます。

1. 聖霊をまったく無視することができます。

イエスを信じるならば、だれにでも聖霊が宿っています。けれど、それが聖霊の宮であるか、あるいは聖霊の牢屋であるかということです。何と多くの兄弟姉妹はみことばに正しく向かわず、聖霊の働きの導きに対して従うことをしていないことでしょう。つまり、実際問題として、自分が決定権を持ち、聖霊は全く無視されているということです。

2. 聖霊を部分的に受け入れるということです。

すなわち、ことばを変えて言うならば、聖霊が信者の全支配権を持つということではなく、部分的な支配権を持つということです。そのような場合には、聖霊は単なるお客様として、よそよそしく取り扱われるのです。おもに自分が支配し、計画し、時々みこころは何かと尋ねるに過ぎないような信者が少なくありません。そのような生活の結果は、決して幸福な生活ではなく、みじめな生活です。

3. 聖霊にすべてを明け渡し、聖霊がすべての支配権を持つという態度です。

この態度をとる人は、次のように証しすることができます。「生きているのはもはや私ではなく、イエス・キリストです」。聖霊に満たされることは、感情の問題ではありません。意志の問題です。すべてを主に明け渡したときに、初めて、私たちは聖霊に満たされるのです。

したがって聖霊に満たされるための前提条件は、
第一に、献身。すなわち、自己否定であり、
第二に、主が支配権を持ってくださった事実を信じ確信することであり、感謝すること。

言うまでもなく、これは私たちの決断にかかっています。ですから私たちは、聖霊に満たされるまで待つ必要はありません。私たちが心を開いてすべてを主に明け渡しさえすれば、満たすことを常に望んでいる聖霊はただちに私たちを満たしてくださるのです。

では大切な質問。

聖霊に満たされているかどうかを、どのようにして知ることができるかということです。答えは、ガラテヤ書5章22節でしょう。

ガラテヤ人への手紙 5章22節から23節前半

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

聖霊が支配されるならば、御霊の実は啓示されます。これは決して敬虔ぶった宗教家、あるいは宗教的な人の努力の結果ではなく、まさに御霊の實です。

もし、私たちが自分の弱さと空虚さを意識して歩むならば、主が「信仰の従順」により満たしを与えられる、ということを経験します。

私たちは何も持っていないので証しすることができないと言うかもしれませんが。自分の考えや感情は大切ではない、と絶えず覚えるべきではないでしょうか。主が私たちの泉であるからです。私たちが主にだけ頼れば、主は私たちの空虚を必ず満たしてくださいます。

私たちの空虚は、「よみがえりの力」を必要としています。

私たちの持っているものが大切なのではなく、「主イエス様がどなたであるのか」、それこそが大切です。

また、私たちがもうすでに受けた祝福はそんなに問題ではありません。私たちがこれから受ける満たしが問題です。

主は、私たちによみがえりの力を与えようとしておられます。

この満たしは、一度に与えられるものではなく、徐々に与えられます。すなわち、「私は今満たされている」、この状態がいつまでも続くということはありません。けれど、その満たしは、つまり「よみがえりの力」は、私たちが必要とする時、必ず「信仰の従順」により主から与えられる、ということを経験するのです。

了